西洋お伽譚春の小人

永代美知子

お祖母さまのお家へ

よく晴れた三月のある日、ローレーンは學校からお家へ歸る道中、

『もうお祖母様からお手紙の來る時分だわ』と考へつゞけてゐたのですが――不思議なことには、丁度お家の門を開けると、ばつたり、郵便屋さんと出逢ったのです。

『嬢ちゃん、あなたへ手紙が來ましたよ。』

さう云つた郵便屋さんの聲も嬉しさうでした。

『あらさう、屹度お祖母様からよ。』

外套と帽子とを玄關に掛け、鞄を居間の卓子に置くと、ローレーンは母様のお部屋へ飛んで行きました。

『あゝお歸りかへ、お祖母様からお手紙だよ。』

『まァ嬉しい、すぐ讀んで見ませうね。何と書いてあるかしら？。』

お祖母様は遠方にある大きな市のすぐ郊外に、大きな屋敷を持つて被在るので、お手紙には何時も一杯面白い事が書かれてある。

『母様、母様、お祖母様はね、夏休まで待たないでね、すぐ私に來ないかつて被仰るの、そしてね、お祖父様のお砂糖つくりを手傳つて貰ひ度いのですつて。』

『どう？。行つてみたい？。』

お伽譚の小人

永代美知子

『私行き度いわ。でも母様、學校を休んでも可いでせうか？。』

『お父様や母様はね、あなたが達者にさへなれば、些とやそこいら、學校を休んだつて何とも思やしませんよ。私達はあなたが鮮らしい空氣を吸つて、今年はもつと〳〵丈夫になつて欲しいんです。だからね、もしあなたがお祖母様の家へ行つても淋しくないと思ひさへすれば、準備の出來次第出かけて行つてもよゞざんす。』

『だつて母様、私これまで何時でも淋しいことなんか無いんですもの。』

『ちやァお祖母様へお手紙をお書きなさい。あなたと乳母とでこの土、曜日からお邪魔に參りますつて。ようく御禮を申し上るんですよ。』

それからの二三日は樂しい仕度で駆はひました。何枚かの温かい小さな着物が裁縫される、お祖母様のお家は寒い處なので、丈夫な靴だの腕絆だのを買ふ。それから可愛らしい園藝道具だの、袋の面に美くしい花を描いた種子などを買ひ込まれました。ローレーンは自分の手で立派な花園を作へ度いと希つてゐたのです。

やがて旅立の日となりました。父様も母様も、お姉様もみんな一緒にステーションまで見送られる。大きな汽車が入つて來た時にローレーンはどんなに胸を躍らせたでせう。

『ちやァ行つておいで、海岸へ行く時には迎へに行くからね。』

と父様が被仰る。

『達者でね。』

さう云ふ母様に續いて、お姉様はまた、大きな聲で、

『思ひッ切り日光浴をするんですよ。それからお祖母様にお砂糖を贈つて頂戴ッて。』

と叫ぶのでした。

汽車は動き始めました。小さな白い旗を振る信號手や、踏切の番人たちは、窓から顔を出してゐるローレーンをどんなにか可愛く思つたのでせう、色んな擧動や笑顔でローレーンの心を浮き立たせました。樂しい時間は經ち易い。まだ暮くもないのに車や給仕の作へた寢床へ入る時間となりました。だが却々眠れません。そして登る

朝、乳母に呼び起された時には、昨日まで遠くに見えてゐた緑の野山が、見わたす限り眞白な、美くしい雪景色と變つてゐたのです。

間もなく立派なステーションへ降り立つと、還ましい二頭の馬に橇を曳かせて、お祖父樣がにつこり二人を迎へました。

「お祖母樣は？」

「まだあんまり朝が早いからの、お家で御馳走の仕度をしてゐるぢや」

朝日に輝く雪の野を、やがて橇は大きな屋敷の門前へ着く。其處には暖かなお部屋と、美味い朝御飯と、顔中喜びの笑を浮めたお祖母樣とが待つてゐました。蜂蜜をたつぷりつけた焼き立てのお菓子、飼牛から搾りたての牛乳なども結構でした。

「お祖父樣、私ね、自働車よりもお馬の方が大好きなの。」

「さうかい？どうしてぢや。」

「だつてお祖父樣、お馬は活きてゐるんですもの、呼吸もするし、それにお祖父樣達に懐くんですもの。」

「さ、外套を着て、私と一緒に厩へ來てごらん。喜驚させるものがある。」

お祖父樣に跟いて厩へ行つてみますと、今橇を曳いてきた二頭が殊りに御馳走を喰べてゐる、その傍に生れていくらにもならぬ兒馬が立つて

「まアー！」

と叫んだきり、何と云つて可いか、解らないほどの嬉しさでした。

その兒馬は眞白に全身に處々蒼色の斑が可愛く浮いてゐました。

「蒼太郎や、蒼太郎や、私これからお前を蒼太郎つて呼んで上げるわよ。」

とローレーンは自分の兒馬に囁いたのでした。

泡壊しのうた

月曜日の朝、ローレーンがお祖母樣のお家の小ぢんまりした潔らかな部屋で眼を覺ましますと、もう、お馴染の日光太郎が部屋中を踊り廻つてゐました。

「お早う、ローレーン、早く着物を着て戸外へ被來い。僕は雪を溶かすんで息も吐けないほど忙しいの。」

階下ではお祖父樣がお待ち兼ねでした。

「さア朝御飯をお喰り。それから暖かにして砂糖園へ連れて行かう。」

「まア好いこと。お砂糖の作へ方を私はつきり覺えて來るわ。」

それは氣持の好い朝でした。橇にまだ冬の雪帽子を冠つた小さな森や、足跡も稀な道を横切つて砂糖園へ着きました。日の輝く空へ、伸び切つた砂糖園の樹かすくすくと立つてゐる。下男のジョンは、幾杯も幾杯も大きな桶で砂糖汁を搬んで來て、小舎の外に懸けてあつた眞黒な大釜の中へ移しました。

釜の下の火を燃し付けると、お祖父樣は

「おまへは此處で、釜の汁が煮こほれないやうに見張てゐておくれ。」

「もしか煮こほれさうになつたら、私どうすれば可いんでせう？」

「釜の縁まで泡が煮立つて來た時に、其處いらの清潔な雪を一掬釜の中に放り込むのぢや。」

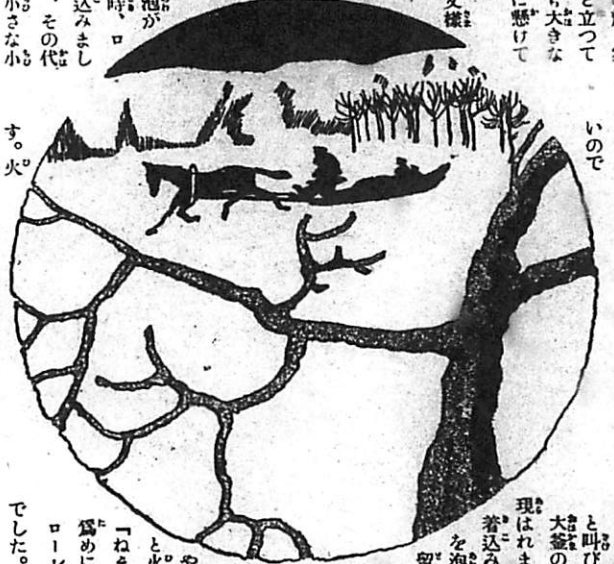
煮え立つ、泡が立つ、やがてその泡が大變な勢でこほれ出しさうになつた時、ローレーンは其の中へ一掬の雪を投げ込みました。すると、忽ち泡は消えて了つて、その代りに眞紅な帽子と襦袢とを着込んだ小さな小さな一人の男が釜の縁に飛び上つて、

「あなた、どうしてそんな事を爲さるんです？」

と、さも〳〵驚いたやうに問ひかけました。

「でも、釜が煮こほれさうなんですもの。」

「あゝ、さうでしたか。それから火の子が惡いので



して了ふんですからね。」

小人はさう云ふと一緒に後を向いて、

「みんな來いーまた泡が立つて來た。」

と叫びました。

大釜の縁には、忽ち十人からの小人が立ち現はれました。みんな眞紅な帽子と襦袢とを着込み、手に手に持つた長い槍で、釜の中を泡を突き壊すのでした。彼等は目にも留まらぬほどの迅さで働きました。それでも今一度お汁が煮こほれさうになつた時。一等最初の小人が釜の下を見て、

「おい〳〵火の子さん、どうかそんなに熱くしないでくれたまへ。」

「おッと承知だ。泡壊も却々大抵ちやアないね。」

と火の子は釜の下から返事しました。

「ねえあなた方、そんなに泡を壊して何の爲めになるの？」

ローレーンはさう訊かずにはゐられませんでした。

「おや〳〵、それを御存知ないのですか。」

と小人の泡壊は一寸妙な顔をして見せましたが、すぐ親切に說明しました。

「これはね嬢ちゃん。私達が泡々壊さないとお汁の中の水分が蒸發しないからですよ。水分が蒸發しないと何時まで經つてもお砂糖にはなりません。」

「あなた王様？」

とまたローレーンが訊ねました。

「どう致しまして！私はたゞ泡壊の係長なんです。おい、氣をつけろ！」

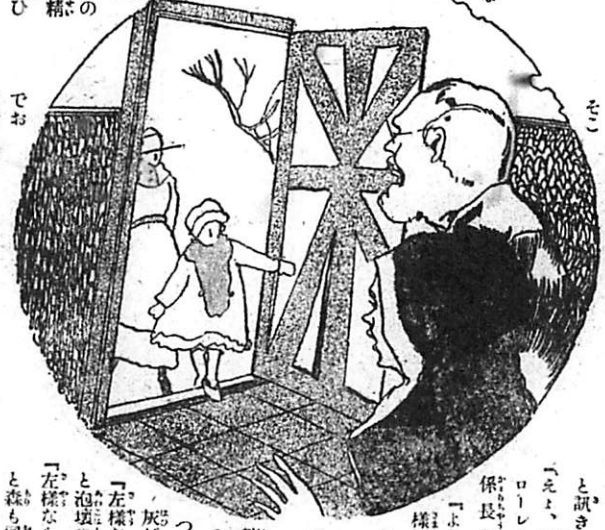
とこの小人は、その時あんまり釜の縁から屈まり過ぎて、今にも中へ落こちさうになつてゐた部下に注意しました。

「汝は砂糖に煮られたいのかい？」

泡壊は係長の冗談を聞いて、みんな笑つて了ひました。それで、釜は復々煮こほれさうになりました。

火の子は惡戯好きの眼でローレーンを見て、それから長い間、泡壊が一生懸命に仕事を爲せねばならぬほどの熱を釜に加へたのです。でも、泡壊の人達は、傍目もふらずに精を出しました。こんな歌をみんな一緒に唄ひながら——。

「こちらで一つの泡突けば
あちらで一つの泡壊す
一秒の間もいそがし
いけれども樂しく仕事する
そこ」



間もなくお祖父様が來て、

「ローレーンや、お汁は煮こほれなかつたかい？」

と訊きました。

「えゝ、些少も」

ローレーンはまだ忙しく働いてゐる泡壊の係長を眺めながら答へました。

「よしよし、大分煮つまつた。後はお祖母様の處へ持つて歸つて家で仕上げをすれば可い。」

お祖父様はローレーンに手傳はせて又もや幾掬りかの雪を釜の中へ入れました。すると、すつかり美事な、糖菓のやうな固まりになりました。

それを桶へ移し、森の中へ飛んで行つて惡戯をせぬやう、火の子の上から灰だの雪だのを打ち掛けました。

「左様なら、ローレーン」

と泡壊の一隊が異口同音に叫びますと、

「左様なら、ローレーン」

と森も同じに答へました。

いざお家へ歸らうとする時、

「あゝ南風が吹き初めた。明日もウンと砂糖を作へられる」

でお砂糖が出來あがる

おいしいお砂糖の香がする」

と下男のジョンが云ひました。

松姫の女王

「ローレーンや、私は下男のジョンと砂糖園へ今年の[illegible]附に行くがのう。お前、一緒に行つて山櫨子の花でも見つけたらどうかい？」

とお祖母さまが被仰いました。

「えゝ連れてつて頂戴。兒馬の喜太郎を連れてつても可いでせうね？」

「それは好い思ひ付きぢや。私等も歩いて行くんだらう。」

とお祖父さまは御賛成でした。

「この篇に御馳走を入れて行かうねえ。それからお前さんが花を摘む時の用意に、木鋏も入れて置きますよ。」

「ありがたうよ、おばあさよ。」

道々は樂しかつた。深い森の中はまだ雪の領分でしたけれども、柳の芽はやさしく萌え天色美くしく暖かく晴れて、春はもうつひ其處まで近寄つてゐるのでした。

「この砂糖小舍の背の松林の中に石楠の花が咲いてゐる筈だよ。喜太郎を此家へ繋いで置いて、一人で行つてごらん。林は此處から一目だから、[illegible]の歸る時に呼んであげようから。」

お

ばあさまのお

許しが出ましたので、ローレーンは嬉しくなつて松林へと駆け入れました。あら！何とふ美くしい景色でせう。松の梢を滑つて輝く日の光はまるで教會の色硝子窓から差し込む光のやうに大地を彩り、その大地は厚く松葉で蔽はれてゐました。けれ共花はローレーンが幾ら探しても、探しても探しても一つだつて見つけられませんでした。

「まだ餘まり寒いからかしら？」

探し疲びれて思はず獨語ちました時、あゝら！あらッ。

「大間違ひ！物を探さうと思へば、その物の在る處を探さなくつちやねえ。」

さうした[illegible]閑かな聲が聞えるではありませんか。

「どうして！私は何處だつて探したぢやないの？」

ローレーンはあまり喫驚したはずみに丁寧な言葉づかひを忘れたほどでした。

が、忽ち自分の周圍へ現はれた可笑しけな女の小人の群を見ると笑はないではゐられませんでした。女の小人達かごく〳〵昔風の、舊式の、土地に鬼ずるやうな綠色の裳の長い衣服を着てゐたからです。

「みんな名前を聞かせて頂戴な。私これまであなた方のやうな人に出會つたことはない

んですから。」

すると、着物はみんなと同じですが、たゞ一人冠を被つた女王が、

「私たちは松姫なのですよ。自然の母神から特別に石楠の寢床に氣を注けるやうに云ひ付かつてゐるのです。今日あなたがその花を探しに此の森へ被來ゐつてことは聞きましたけれど、花の所在をお教へする前に是非約束して頂き度いことがあらんです。それはね、入用の花だけしかおとりにならないこと、それから枝をお折りにならないことなのです」

「それは大丈夫よ。だから私、木鋏を持つて來ましたわ。それに私、大好きなんですもの花が」

「だらうと思つてゐました。だつて小人はみんなあなたが大好きなのですからね。ちやア此方へいらつしやいナ。」

さう云つた女王を先きに、松姫たちはローレーンを蔭れた樹蔭へ案内しました。丁度雪が赤ちやんの寢床の上の毛布のやうに殘つてゐる、その周圍をまんまろく廻りました。見ると、石楠の小さな眞紅な蕾が綠なす葉の間に睡つてゐました。ローレーンは夢中になりました。持つて來た籠に一杯になるだけの花を、枝を傷めぬやう、氣を注けて摘み取りました。松姫達はその上へ苔をふうわりとかけさせ、一方蕾の寢床へはもと通り白雪の毛布を掛けてやりました。

「本當に有りがたうよ。松姫の女王さま。私こんな可愛い花が雪の下に寢てゐようとは些とも知りませんかつたわ。」

とローレーンはお禮を申しました。

「どうしまして。私たちは、あなたが被來たので大喜びなの。あなたが去年砂糖園で爲すつた色んな事を、私たちはいつも風の子から聞いてゐましたのよ。」

女王はさう云つて、また、

「私たちはいま花を覺まして了つたから、も一度よく寢付かれるやうに、歌を唄つてやりませう。」

「えゝどうか！私、歌を聞くこと大好き」

ローレーンの言葉の濟まぬうちに、小さな松姫たちはみんな傍の松の梢に舞ひ上りました。ローレーンはその下の、松葉の柔らかな敷物に坐つて耳を傾むけました。

「ねんねん、ねんねん、ねんねんこ
子守のお歌をうたひましよ
ねんねん、ねんねん、ねんねんこ
春のお花やねんねしな
ねんねん、ねる子はよいお花」

「おゝい、おゝい」と其の時まるで異つた大きな聲が聞こえましたので、ローレーンは思はず立ち上りました。小人たちの歌聲から比べると、それは確かに巨男の聲です。いえ、本當に巨男が――下男のジョンがローレーンを探しに來たのでした。

「嬢ちやん、花を見つけましたか？」

「えゝ深山！可愛い石楠の蕾を籠一杯とつて來たわ」

遙かに、松林の間から、やさしい、なつかしい子守歌が聞こえて參りました。

「松林の風はどんな歌を唄つたい？」

おぢいさまは、ローレーンを雲太郎に乘つけながら、さう云つて笑ひました。

「どうやら雨になるらしい」

ローレーンはたゞ默つて微笑しました。

豆太郎の忠告

「春が來た、春が來た」

五月の晴れ渡つた或日の朝、心地よい雲雀の唄が聞こえました。

「孃ちやん、雲雀が花をお植ゑと云つてますよ」

と下男のジョンが申しました。

「あら嬉しい！　私、園藝道具を持つてくるわ。」

「おばあ様がね、私に今朝花園を耕すやうに被仰いましたよ。それから孃ちやんが花床を作つておやんなさい」

一日中、花床を作へるので、ローレーンは温かな柔らかな褐色の土を弄つて樂しく働らきました。その翌日には、お部屋の窓に載つけた箱の中で育ちかけてゐたパンジーと、ナスターシアムの苗とを、すつかり花床へ移しました。またその翌ゐる朝、ローレーンが見廻りました時には、どの花も、ちつとも萎つた風は無く、まるで最初から此の花床へ播かれ、芽生えから育てられたかのやうに元氣に滿ちてゐました。

「今日は何を爲るおつもり？」

ローレーンの周圍を躍り廻りながら、日光太郎はさう訊ねました。

「今日はね、種子を播かうと思つてますの。花芥子と、金盞花と、蜀葵と勿忘草とを播くんです。それからペチユーニアも播かなくつちやア、私、大好きなんですからね。」

「あなたは何でも花は好きなんですね？」

「えゝ〳〵。でも特別に好きなのも有るんですよ。」

蜀葵は花園の壁の根に植ゑ、朝顔は花床の周圍に播かれました。それから一日中、樂しく忙しく働いて、その晩寢床へ入りました時には、ローレーンの心は美くしい花の夢で一杯になつてゐました。

一夜明けて、また、ローレーンが花園へ出て參りますと、待つてゐた日光太郎が、

「今日のお仕事は何ですか？」

と訊きました。

「スキートビーよ。私ね、お花は何でも好きですけれど、スキートビーが一等氣に入つてますの」

スキートビーの種子袋を開けたローレーンは、その今にも泣き出しさうな、皺ッ面した種子のおどけた顔を見て、可笑しさに一人で笑ひました。

やがて、五分ばかりづゝ、幾つも〳〵小さな穴を掘つて、その中へ種子を落さうとした途端、小さな聲が聞こえたので思はず喫驚して飛び上りました。その聲は、

「おや〳〵、ローレーン。スキートビーをそんな播方しちやア」

と云つたのでした。

驚いたローレーンは、今度は笑ひだしました。黃色の洋袴、綠色の上衣、長い脚絆を穿いて、長い手袋をはめた世にも可笑しけな一人の小人が、世にも小さな鋤に凭れてゐたからでした。

「あなたにはまだお目に懸かつた事は有りませんかつたわね。お名前は何とおつしやるの？」

「私達は豆太郎と云つて、スキートビーを植ゑる連中です。だがローレーン、あなたのやうに種子を地面の上ッ皮にお播きになつちやア、すぐに鳥さん夫婦の朝御飯にされちまひますよ。それでは困るから、私共はこんな播方をされたスキートビーを、いつも夜つぴてがよりで播き直すんです。一體、スキートビーを播くにはもつと〳〵深めにしなくつちやア」

云ひながら豆太郎は、變てこな口をゆがめて、ピーと口笛を吹きました。それを合圖に

同じやうな裏ひをした小さな豆太郎の群が、ぞろ〳〵とローレーンの眼の前へ、こんな歌をうたひながら姿を現はしました。

『豆太郎、豆太郎
スキートビーの種子を播く
穴をば深く掘り下げて
スキートビの子達を寢かせましよ
まことに氣持の好い寢床
ころ〳〵寢床へ寢に行きな』

うたひながら、豆太郎たち、一齊に、小さな〳〵鍬を持つて穴を掘り初めました。そして、ローレーンが十まで數へ切らないうちに、丁度五寸か六寸もあらうかと思はれる深さの穴を、幾つも〳〵掘り開けました。

そこで四五人の豆太郎が一つのスキートビーの種子に集まつて、

『よッしよい、えッしよい』

掛聲しながら、その種子を穴の中へ轉がし込びと、殘りの豆太郎たちが、寄つてたかつて上から土を掛けるのでした。

『ね、ローレーン、これで仕方が解つたでせう？』

と、一等最初に現はれた豆太郎の大將が口を利きました。

『さア、おまへ達はもう行つていよ』

大將の許しがでましたので、豆太郎たちはみんな恭しくローレーンに一禮して、小さな鍬を肩に、行列を組んで、大きな樹木蔭の彼方へ歸つて行きました。『ころ〳〵寢床へ寢に行きな』と唄ひつれながら、

『ぢや左樣ならローレーン』

と豆太郎の大將も叮寧にお辭儀しました。

其夕方、御飯の時にローレーンは、

『おばあさま、私けふ、スキートビーを播きましてよ』

とお話いたしました。

『よく播き方を讀みましたかい？スキートビーはよつほど深く蔭かなくちや可けないと。』

おばあ樣はさう被仰いました。

『えゝおばあさま、知つてゝよ。丁度あれ位の深さで可かつたと思ひますわ。』

ローレーンは美しくほゝ笑みながら言葉靜かにさう答へました。（あとゝう一回）